

うるくの歴史と文化を語る会  
**会報 ガジャンビラ**  
**第24号**

発行: うるくの歴史と文化を語る会  
 発行人: 赤嶺健治 編集人: 赤嶺和雄  
 〒901-0156  
 那覇市田原4-1-1 JAおきなわ小禄支店内  
 TEL. (098) 857-1175 FAX. (098) 852-1486



[20代自画像]  
 幹事 長嶺弘善  
 (大学非常勤講師)

具志の通称「きらぎ」の語源考察である。また『体験記』には別刷り[校歌及び運動会の歌]が挟み込まれていた。そこで、国民学校の状況を中心に、疎開状況と「進攻図」を割愛し、「附」と別刷りを含めて、標題を『在りし日の小禄第一国民学校』とした。また、小見出し改行の付加、歌曲含む誤字脱字等訂正、その他構成変更等、補訂につき遺族の了解を得た。高良は在野の言語学者で、大変な勉強家である。『体験記』の前に『南島祖語の構造と南島語と日本語の対応関係』(毎日新聞社1980年5月)を出版した。そして『体験記』の後に3冊の著作を出版した。更に『日本語の起源2<sup>nd</sup>』(琉球新報社2013年11月)が死後に刊行されている。

『50年前の沖縄写真で見る失われた遺宝』(サントリー美術館1972年2月)  
 [首里当蔵の天王寺本殿王妃廟]



[移築後の女子実業補習学校内部]



人口増加・就学率上昇に伴い学校も手狭になったであろう。1923(大12)年に、それまでの舟形[ますがた]校舎から、赤レンガ造り2階建て2棟の校舎に建て替えられた。これまで、沖縄県初のレンガ造り校舎を誰が設

## 小禄尋常高等小学校の沿革

(高良益人『在りし日の小禄第一国民学校』解題)

高良益人(字具志1930年7月生・2013年10月没)は、戦後45年目に、戦争の記憶、少年期の思い出を私家版の冊子『少年の沖縄戦体験記』にまとめ、友人・知人に送付した(沖縄タイムス1990年4月2日夕刊)。覚えたてのワープロで原稿作成し、A4版で表紙と本文29頁にまとめたのは還暦のときである(妻高良英子2018年12月私信)。原稿用紙400字詰め約73枚分の本文は、8頁まで国民学校の状況、その後は米軍空襲と避難疎開の様子が続き、27頁に氏名等が記載され、28頁に「米軍の上陸と進攻」図がある。最後29頁の「附」は、糸満街道・

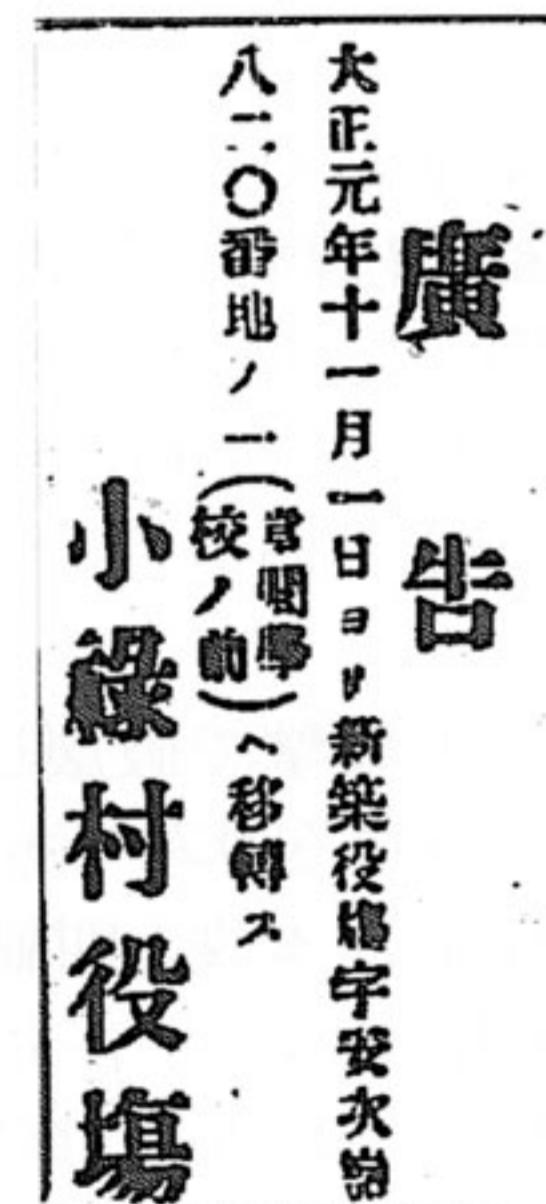
### 《小禄尋常高等小学校の略史》

1880(明13) 小禄間切番所敷地に小禄小学校創立  
 県下14校中1番早い設置(4字「小禄学校」の旗)  
 1891(明24) 小禄尋常小学校となり、赤嶺村に移転  
 1902(明35) 西部小禄尋常小学校と改称  
 分離校: 東部小禄尋常小学校(金城学校)設置  
 1903(明36) 小禄尋常高等小学校に改組改称  
 東部小禄尋常小学校を小禄尋常小学校と改称  
 小禄間切立女子実業補習学校を小禄尋高内に併設  
 尚家私寺天王寺建物を字当間に移築し翌年移転  
 行政区画変更、赤嶺村は安次嶺村に合併  
 1907(明40) 寻常小学校(尋常科)6年義務制度  
 1908(明41) 沖縄県及島嶼町村制により間切が村へ  
 1912(大1) 小禄村役場が「當間学校ノ前」へ新築移転  
 1923(大12) 赤レンガ造り2階建て校舎(2棟)新築  
 1941(昭16) 国民学校令、小禄第一・第二国民学校に  
 1945(昭20) 3・23赤嶺村空襲で学校役場共に壊滅

小禄尋高(第一国民学校)は、糸満街道東側の字赤嶺の地にあり、小禄村役場の北側に位置した。街道西側の字当間には尋高分教場、女子工芸学校(補習学校の後身)と青年学校とがあった。新1年生の教室は分教場にあり、2年生から赤レンガ校舎の教室に移った。補習学校は「お寺の本堂のような」(『ありし日』)大きな校舎である。これは、元々は第2尚氏王妃廟・天王寺本殿である(『50年前の沖縄写真で見る失われた遺宝』サントリー美術館1972年2月、『那覇の史跡・旧跡』那覇市歴史博物館2014年3月)。補習学校校舎として、小禄間切が購入移築した(『島尻郡誌』教育部会1937年148頁)。終戦直前の卒業式もこの工芸学校で行われた。尋高が赤嶺村にありながら当間学校といわれたのは、「創立当初この分教場が本校舎でそれが字当間にあった」からであろうという(『ありし日』)。

小禄村役場は1912年に字赤嶺(当時は字安次嶺)へ移転する。冗談めかすと、尚穆王による赤嶺番所への移転裁可(1771年)の実現である(『ガジャンビラ15号』拙稿)。広告で移転先「當間学校ノ前」と案内するほど、当間学校は一般的な通称である。

琉球新報1912年  
 (大正元年)11月1日



計施工したかの資料を発掘できなかった。『小禄村誌』（発刊委員会1992年8月）には、レンガ造りかコンクリート建てかの論争について記されているが、工事に関する記述はない。それを高良は、「大宜味村出身の名建築家前田朝一氏の設計施工」と明記している。これだけでも、『在りし日』の資料的価値は大きい。大きな手掛かりとなった。前田朝一（1884年生1927年5月没）は、明治30年代から活躍する大宜味大工（饒波大工）の先駆者である。前田組を組織し、県人として初めて公共建築工事の入札に参加した（『大宜味村饒波誌』2005年1月96頁）。そして小禄尋高新築工事を請け負う。工事の「壁体は煉瓦積み、内部二階床は旧校舎の梁」を使用し、梁は「伊集〔いじゅ〕木で最高の木材」だった（金城賢勇『大宜見大工一代記』1988年3月23頁）。枱形の旧校舎を解体して、部材をレンガ造り新校舎に使用したことを示唆する。前田は小禄尋高（1923年）の前に城辺村福峯小学校新築（1918年）を請け負い、また、与那城村伊計尋常高等小学校（1925年）、摩文仁尋常高等小学校、那覇測候所及び県立農業試験場（1926年）も請け負った。しかし、天妃尋常小学校（1927年）の工事半ばに40代で死去した。摩文仁尋高は平屋建てだが赤煉瓦造りである（『米須字誌』編集委員会1992年12月226頁）。前田組は卓越したレンガ建築の施工技術を持っていたのであろう。大工から出発した前田は、設計技術を身につけたのではなく、設計監理者の指導の下、施工技術を高めていったと思われる。小禄尋高の設計者は小禄村役場（あるいは沖縄県）の技師であろう。なお摩文仁小学校も、1880年に県下で14校設立された内の1校である。

高良は、門柱への電灯設置、校舎の構成、教室の配置、校庭の活用、さらには高台にある学校から見晴るかす風景を活写している。これだけの情景描写を、これまで見聞きしたことがない。日記風に、あるいは備忘録風に記録している人が他にもいるのではないか、それが世に現れることを期待するのみである。

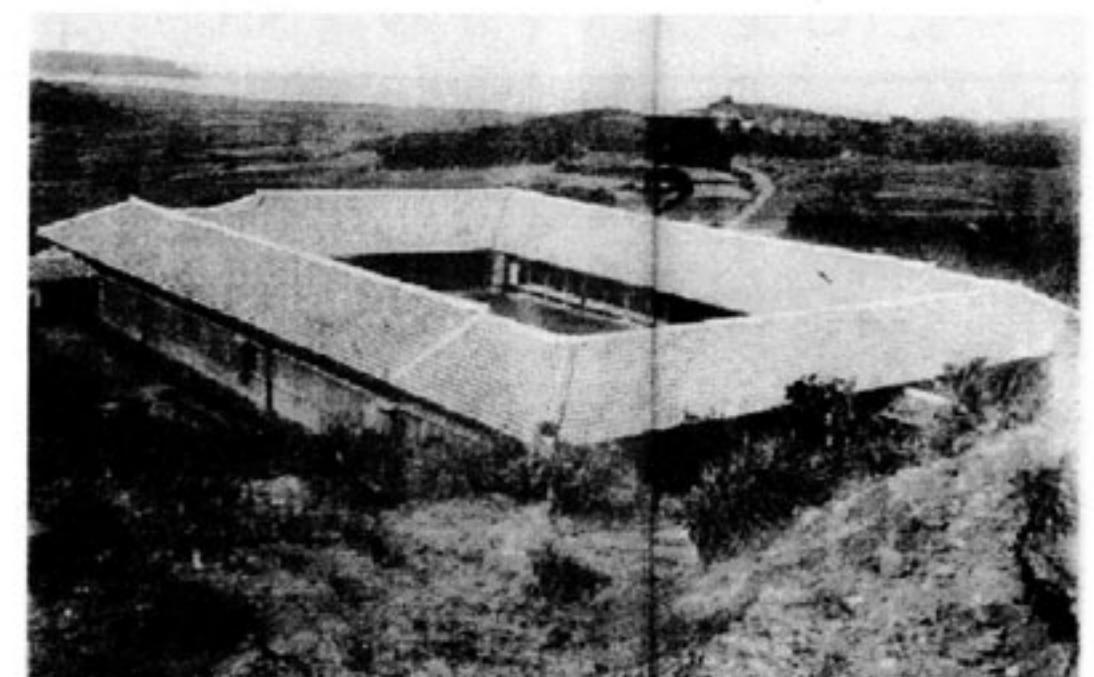
1944年秋に学校は海軍部隊に接收され戦争へと押し込められ、「天皇に対する忠義」を根幹にした軍国主義教育が巧みに行われた。戦後、文教学校に入学した高良は「大君の為に死ぬ使命感を捨て」、新時代の理想に燃えたという。逆に、戦時下の高等科生・軍国少年として、与那国善三校長は台湾に逃げたと感じられたのであろう。長嶺和子『与那国善三をとおして地域を見つめる』（ガジャンビラ17号）は、与那国を「最後の校長」とし、「昭和19年8月の依願退職」としているが、資料調査の不十分さが現れている。与那国校長の後に、當銘由金校長が11月に赴任した（『在りし日』）。学校は海軍山根部隊が全部使用しており、教育は「公民館や鎮守の森」等で行われた（『當銘由金一奉仕の心に生きる』出版委員会1986年10月）。當銘は戦後、文教図書を創設し社長となった。与那国は遺族連合会や観光協会事務局長などを歴任し、1965年県条例「慰靈の日」制定に関わることになる。当初制定の22日から23日に変更したのは、戦争史を研究した山城善三（与那国を改姓）の証言によるという（琉球新報2018年6月23日「慰靈の日ってどんな日？」）。山城は、第32軍司令官牛島満自決を「23日午前4時30分」と記している（『慰靈塔案内』自費出版1970年4月）。

1945年3月23日から3日間続く小禄大空襲・爆撃を、高良は『在りし日』に詳述している。私が注目するのは疎開準備である。高良一家は、食糧や日用品などに加えて「仏壇」（位牌）を枠ごと布団に包んで携行した。その布団は高良が背負ったという。私の祖父・長嶺弘は外した「位牌札」を十数枚、風呂敷に包んで腹に巻いて疎開した（拙稿・ガジャンビラ14号）。そして個人的に共感するのは、高良の希望で、次兄が小学校の皆出席賞に貰った漢和辞典も荷物に入れたことである。高良が言語学に打ち込む出発点となったであろう。疎開と比べようもないが、私は5年前人生2度目2週間入院の際、本は藤堂明保『漢字源』一冊のみを携えた。

米軍爆撃で破壊し尽くされた学校を、戦後、高良は目の当たりにする。高さ2メートル横6メートルの一部レンガ壁が残るのみであった。もちろん、分教場や村役場そして赤嶺集落も、跡形もなかった。

校歌は本文と別刷りとで表現が異なるが、注目すべきは3番3行目であろう。本文「誠」の箇所が別刷りでは「眞実〔マコト〕」となっている。別刷りの校歌は、『体験記』完成後に作成したと考えられ、「復元」と強調しており、高良は「誠」から「眞実」に訂正した思われる。更に「眞理〔まこと〕」と記す資料もある（『那覇市教育史 資料編』教育委員会2000年7月）。「眞理」には倫理的正しい生き方の意もあるという（『広辞苑 第七版』）。つまり海外雄飛・内国富強に、偽らない正しい生き方で進むべきことを歌っているのである。なお、平良徹也『♪小禄第一国民学校の校歌』（ガジャンビラ17号）が、歌詞について詳細に論じている。

小禄尋高の発展（ガジャンビラ17号）  
1880年 小禄小学校設置：茅・瓦葺き  
1891年 尋常小学校となり、赤嶺村移転  
升形瓦葺き平屋建て（写真1901年頃）



1903年 尋常高等小に改組改称  
1923年 煉瓦造り新築（写真1940年頃）





## 在りし日の小禄第一国民学校 （『少年の沖縄戦体験記』改題）

高良益人 = 著  
（長嶺弘善 = 補訂）

### 当間学校

高良益人

昭和二十年三月二十二日、小禄第一国民学校の卒業式。学校とはいっても本校舎はすでに海軍部隊に接收されて兵舎になり、那覇市と糸満町を結ぶ国道をはさんで西側にあった分教場も、一部那覇飛行場の飛行機のエンジン修理工場になっていた。式場になったのはお寺の本堂のような鬼瓦のある大きな木造の建物で、青年学校、授産学級のような女子補習学校の校舎として残されているのを利用した。小学校の本校舎が切り通しで開通させた国道の東側にあって、大正以後生まれた者にはこの字赤嶺にある本校舎を母校と思うだろうが、学校の別名が当間学校と云われていたのは、創立当初この分教場が本校舎でそれが字当間にあったからであろう。創立式典の日も雨に降られ、遠足や運動会等、学校行事の度に雨が降るので、長い日照りが続くと、那覇市内では又当間学校で何かやって貰わないと……と当間学校はその儘「雨ごい」の意味ももっていた。

本校舎は赤レンガ造りの立派な二階建、前の校舎が十教室と校長室、職員室、後の校舎が八教室の前後二校舎の裏に便所の建物があって、正面から便所迄長い渡り廊下でつながっていた。前の校舎の西側に用務員室と当直教師の宿泊室、そこに養成舎の額をかけて上級生女生徒に室内の礼儀作法を教えていた。後の校舎の東側から中庭に一棟三室の一階建があり一教室は上級生女生徒の裁縫室、ここは黄色いニス塗りの三人掛けの立派な机と、椅子の座る所が凹面になっているこれもニス塗りの立派な椅子があった。残り半分は掛図、オルガン、ソロバン等の備品室だったが、昭和十六年から生徒がふえた為に、備品室を中心に入り仕切り、応急的に一教室造ってここでも授業を始めた。もう一棟前後校舎間の中庭の西端に畜舎があって、ザーネン種の山羊三頭を飼っていた。

### 赤レンガ校舎

森の中腹を平らにして、高台に堂々とそびえる赤レンガ造りの二棟の二階建校舎は、大宜味村出身の名建築家前田朝一氏の設計施工で、その栄誉を讃えて校内の二つの門柱に、一本には前田朝一施工と記され、一方には竣工年月が記されていた。竣工年月は、はっきり記憶していないが大正十二年十月となっていたような、おぼろげな数字が浮かんで来る。前田氏はこの門柱に、自分の存命中点燈するといつて長い間電燈がついていたらしいが、学校生活が昼間の為その電燈が点燈していたかどうか記憶していない。校庭が高台にあるから、南西方面の景色はすばらしく、すぐ真下から遠く海岸まで、畠の作物の違いによってモザイク模様のような風景が季節の変わり目毎に変化し、特に大豆の栽培期には、植付準備中の土色から出芽期の黄緑、暫くして濃緑色、緑豊かな……と表現されるのも短く、次第に黄ばんだ色に変わり、五月末小満の雨期に入る頃は黒褐色となる。僅か三ヶ月の間に次々と変わる大豆畠の色は、季節感の少ない沖縄の自然に、四季の変化よりも細かい二十四節の移り変わりを感じさせた。畠の景観の南西に、平たい尾根の瀬長島が航空母艦のように見え、遙か西方に、慶良間島が浮き島のように水平線上に並んで見える。学校辺りから豊見城村北部の雨水は瀬長島の北側に流れるが、真水をきらうサンゴがその辺りに育たず、遠浅の中にその辺だけが入江のように深くなっている。夏の日差しの強い日は、海の色がその深浅に合わせ、又上空の雲の色をうつして見事な色どりをみせ、午後学校の帰りが遅い日等、西に傾いた太陽が入道雲にかくれると、その雲のふちは燐然と白銀色に輝き、その色の射光線が伸びて美しく、同じ光景が二時間も遅れると、白銀色は金色に変わって、東西の名画も描き足りない程の美しさとなる。然し私はこの様な光景よりも、台風の後に海岸から三～四糠沖のリーフに散る波涛が好きだった。台風後の海上の高いうねりがリーフに当たって真っ白いシブキを上げ、寄せては散り又当たって碎ける。それも大嶺岬沖から糸満沖まで数糠も続いて、終日寄せては散り又寄せて白いシブキを上げて碎ける。それが波のラインに沿ってリーフに白いシブキが走る様に移動する。あのリズミカルでダイナミックな波涛の白い乱舞は、正に壯觀というべきで、小学校時代に何度もこの光景をみた私は幸運だった。

東側は地形が学校よりも高く、余り景観には恵まれなかつたが、校舎のバルコニーから北西をみると、遠くに那覇港外、鏡水の白い灯台が見え、その向こうを那覇港に出入りする船が行き来していた。西側には那覇飛行場があるが、海岸沿いの低地にあってよく見えない。然し航空隊員は四大節の度に、代表者が学校に来て天皇の御真影礼拝をし、又学校の生徒全員が滑走路の石拾いをしたり、上級生が飛行場の草刈りをしたので、その謝礼の意味をこめて、運動会の昼食時間に飛行機が飛んで来て、校庭目がけて急降下したり、上空

で宙返りしたりのサービスをしてくれた。

校庭は東西に細長く、校門近くから東端近くまでに100メートルの直線コースがとれ、小学校生用に160メートル、青年の運動会には東側に大きく弧を伸ばして200メートルトラックを作つて競走した。広い校庭の西端に、碗を伏せたように下枝が横に広がった大きなガジマルが2本、もう1本校門北側に一番大きな巨木と言えるガジマルが生えていた。この門横のガジマルは恐らく校地を均す以前からそこに生えていたものであろう。そのゴワゴワした地根（気根ではなく）が斜面に長く伸びて、台風に強いガジマルの樹勢を形に表しているかのように根をはり、大きく枝を伸ばしていた。

小禄村は、旧那霸市南部、豊見城村北部とそれぞれ隣接し、北西側は那霸港外から、南西の豊見城村との境まで海岸になっている。人口約一万人、私の出た第一国民学校の他に、俗に東部といつてはいた第二国民学校があり、第二国民学校は昭和九年入学生までは高等科がなく、九年入学生で高等科に進む生徒は高等科だけ第一国民学校に通っていた。学級編成は昭和十二年までイロハの三組に分けていたが、昭和十三年から松竹梅と呼び方を変え、生徒が増えた昭和一六年から更に桜組を作って四組になる。昭和二十年の在籍一二六三人と覚えている。一年生の四組は分教場で、二年生から本校舎で授業していたが、昭和十九年から教室不足で高等科二年生の三組を男女別に分けて二組にした。二組にされた上に、進学の為の傍聴生という留学生が三人残って、教室は身動きのできない状態になっていた。

## 戦争の足音

沖縄本島南部の西海岸に面して、緑豊かな南島に、赤レンガ積みの堂々たる校舎、そこで子供たちは睦むだけでなく大いにケンカもしながら毎日毎日新しい知識を身につけた。北東に位置する首里の古城方面から昇った朝日が、夕方西の瀬長島方向の空に、丹色というよりも金色といった方がいいような光景を映し出しながら沈んで行く。天皇に対する忠義と、親に従う孝行が教育の基本で、毎日昼食の前に、「箸とらば天地御代の御恵み 君と親との恩を味わえ」と歌つてから食べ、授業が終わると、「海行かば水漬く屍山行かば草生す屍 大君の辺にこそ死なめ かへり見はせじ」か、「御民われ生ける驗[しるし]あり 天地の栄ゆる時に遇へらく思へば」を歌つて授業を終わった。天皇の為に、国の為に死ぬことは最も価値のある生き方で、学校生活はその為の鍛錬修業の場にすぎなかつた。貧しい沖縄の県民は、本土や満州だけでなく、遠く南米、北米、ハワイ、台湾、フィリピン、などに出稼ぎ移民として多くの労働者を送つた。私の両親もフィリピン、ミンダナオ島ダバオ市に出稼ぎ移民として渡り、私は奇しくもアメリカの植民地のアメリカ人の産院で、アメリカの独立記念日7月4日に生れ、その日は後に私の出生地フィリピンの独立記念日にもなっている。こんな土地柄だから、校歌も、世界に雄飛して理想を求めるのではなく、「稼いで来いよ、儲けて来いよ」の送り言葉を裏付けるように、「世界に富を求むるも」と歌つた。授業が終わってから何度も「天地の栄ゆる時に遇へらく思へば」と歌い、校歌で、「栄ゆく御代に後れざる 強き御民と我成らむ」と歌つていると、何か日本が際限なく発展し、自分も一人の国運の担い手であるかのような気になっていた。

学校は十九年の秋頃海軍部隊に接収されて、5・6年生組、高等科生組とわかれ、字の事務所、製糖小屋などで適宜授業をしていたが、二十年に入ると高等科生は勿論、四年生あたりから毎日飛行場やその周辺の基地建設の手伝いに動員された。この頃から学校とは名ばかりで、与那国善三校長は台湾に逃げ、新垣教頭は、県内各学校の天皇の御真影の疎開所が久志村の山中にできて、そこの管理者として出向し、職員もバラバラになっていた。最上級生の級長だった私は、生徒であると同時に、まるで用務員のように校長から雑用をいいつけられた。この敵前逃亡校長に戦後二十二年頃会つた時、ニコニコ笑いながら「君はよく覚えているよ」といわれたが何か割り切れないものを感じた。新垣教頭に二十七年頃会つた時「御真影は焼却したんですか」と聞いたら、元教頭は急に姿勢を正して「本当に恐れ多く申し訳ないのですが、そうするより他に方法がなかったんです」と、かっての学校の生徒にすぎない私に、深々と頭を下げた。明治生れの小柄の元教頭は、戦後になっても天皇の写真の始末の責任を感じ、良心が責めていたのであろうか。

[補訂者]〈注1〉「箸とらば……」は、国民学校において昼食時に全国的に唱和されていたようである。〈注2〉「海行かば……」は、1937年国民精神総動員法の下、強調週間のテーマ曲。〈注3〉「御民われ……」は、翼賛運動で日本文学報国会が制定し内閣情報局が発表した愛國百人一首に含む。〈注4〉次項の「愛國行進曲」は内閣情報局が公募し、審査員が補作した。

## 校 歌

- 一 磯に不斷の 花咲きて  
常磐の緑 濃きところ  
そびゆるいらか 摆るぎなし  
これぞ我等が 学びの舎  
学びの園に 瞳みつつ  
勤しみ摘まむ 教へ草
- 二 古城の彼方 雲晴れて  
昇る朝日の 勇ましく  
瀬長の浦に 丹ほふとき  
君と親とに 仕へなむ  
尊き誓ひ 固めつつ  
鍛へ練りてむ 身と心
- 三 世界に富を 求むるも  
みおやの地に 鍬取るも  
尽くすは 同じ誠なり  
自立進取の 意気を持て  
栄ゆく御代に 後れざる  
強き御民と われ成らむ

### 3・22卒業式

新しい校長當銘由金氏が赴任したが、学校とは名ばかりのバラバラ、私は生徒のまま用務員のような雑用係も度々言いつけられ、忙しい思いをしながらいつの間にか三月二十二日に、卒業の日を迎えた。その日は薄曇りだったように記憶する。本校舎が使えた時には、前の校舎の二階の東側三教室の仕切りを取り外して、午前中は四年生迄、午後は五年生～高等科生と二度に分けて式をあげていたが、その日は、分教場隣の寺の本堂のような補習学校で全生徒同時に式をあげることになった。卒業証書も、各種賞状もハガキ大の藁半紙にガリ版刷りの簡単なもので、戦争が終わって紙が手に入るようになれば、その時再発行します——という状態だった。卒業証書も貰って、これから校長先生の訓話、来賓の挨拶などが当然あるのだが、急に先生方の動きがあわただしくなり、卒業式の雰囲気が変わった。この時上級機関から、米軍が攻撃圏内に入ったから児童を解散させるように、との命令が届いたらしい。音楽の得意な安室先生が、「皆で愛国行進曲を歌って式を終わります」と言い終わるとすぐに、「皆元気を出してハイッ」と右手を上げてコンダクトをはじめた。

富士山を見たこともなく、金甌が何かも知らないが、子供たちは声をはりあげて歌った。絵で見た長い裾野をもって高くそびえる富士山のように、大八州の盤石を信じ、子供らしい大きな夢をもって歌った。教育の柱は忠君愛国であり、教育勅語の教えによって皇運を扶翼する使命感をもち、八紘一宇が何かは知らないが、一等国民である日本人が、三等国民を導いて世界に正しい秩序ある平和をうち立てようと高い理想をもっていた。十日後には師範学校生になる予定だった私は、自分なりの理想をもっている気になって歌詞に酔っていた。天皇を中心とした皇国のすることはすべて正義に基づく聖戦であり、神風にも守られる皇国の不滅を信じ、授業がおわる度に、「天地の栄ゆる時に遇へらく」思い、校歌を歌う度に、「栄ゆく御代に後れざる 強き御民と我成らむ」と思った生徒が今声を合わせて、「皇国つねに栄あれ」と歌うと、もう卒業式の雰囲気ではなかった。

昭和十二年日中戦争が始まった年に、この分教場の一年ハ組に入り、入学したその年に中国に侵略した将兵に送る慰問袋用の作文を書かされた私たちの小学校生活は、戦争の年に始まり、又明二十三日から始まる沖縄戦の前の日の今日終わるのである。平和な時代なら、八年間の学校生活を終わる卒業の喜びと共に、別れのさびしさ、長く続いた学校生活に区切りをつけるものの感傷もあったろう。卒業式に「螢の光」を歌いながら涙を流す女生徒の姿を何度も見てきたし、男の子もそれに似た感傷をもっていたに違いない。然し今日は正に沖縄戦開始の前日であり、既に敵の偵察機は沖縄近海まで飛来していたであろうから、異様な雰囲気の中で、「皇国つねに栄あれ」と歌い終わると、集団のもつエネルギーとでもいうか別れの日の感傷どころか、轟く歩調を受けついで、皆で大行進を始めたいような感情の高ぶりを感じた。

然しそれも束の間、歌い終わると先生が、「情報が悪いからこれで式を終わります。みんな寄り道をしないで真直家に帰るように。では解散ッ」と叫ぶと、生徒の感情の高ぶりは急に不安に変わり、先を争って家路へ走りだした。式場から走りでた生徒は、分教場前の東西に走る路上を、先を争って東に西に走った。恐らく北側の道も同様であったろう。情報が悪いということは、敵が近くまで来ていることを意味し、そんな時に子供が保護者の親から離れているのは大きな不安である。皇国常に栄えあれ、と歌っていた時の集団のもつエネルギーは、逃げる時には、遂に集団から後れる者だけが敵に撃たれるような敗者の恐怖心をかきたてる。校門を出る時の千人近い大集団のなかで、恐らく誰一人ゆっくり帰ろうと考えた者はなかっただろう。走りながら兄弟姉妹の名を呼び、友だちの名を呼ぶ。子供のカン高い叫び声がとび交いながら先を争って走る。皆走った。それは卒業式を終え、感傷に満ちて別れを惜しむ姿とは全く次元の違う光景で、沖縄戦開始前日にふさわしい戦場で敗走する群衆の姿であった。そしてその翌日から約三ヶ月の沖縄戦で同級生の約二割は若い命を失い、校舎は完全に破壊された。翌年の夏に、本校舎の校門の辺りに立った私は、何とも表現し得ない悲しい気持ちになった。あの立派な赤レンガ造りの校舎は、前の校舎の西端前面のレンガ壁が、高さ二米、横六米位残っているだけで完全に破壊されていた。何の為に、僅かに十平方メートルの壁を残すまでに破壊したのだろうか。何十発、或は百発以上の爆弾砲弾がこの校舎に撃ち込まれただろう。首里方面の主戦場に比べれば、特に激しい戦闘が行われた訳でもないのにこれ程までに破壊された校舎を見ると、沖縄本島南部の戦闘が如何に激しかったか、そして疎開しないで地元に残って死んでいった幼友達、教師、村人たちが逃げ場のない戦場で、このすさまじい破壊力の中で、おびえ戦きながら死んでいったかと思うと、耐えられない気持ちになる。

### 愛国行進曲

- 一 見よ東海の空明けて  
旭日高く輝けば  
天地の正氣 澄刺と  
希望は躍る大八州  
おゝ清朗の朝雲に  
聳ゆる富士の姿こそ  
金甌無欠搖るぎなき  
我が日本の誇なれ
- 二 起て一系の大君を  
光と永久に戴きて  
臣民我等皆共に  
御稜威に副わん大使命  
往け八紘を宇となし  
四海の人を導きて  
正しき平和うち建てん  
理想は花と咲き薫る
- 三 いま幾度か我が上に  
試練の嵐 啓るとも  
断乎と守れその正義  
進まん道は一つのみ  
あゝ悠遠の神代より  
轟く歩調うけつぎて  
大行進の行く彼方  
皇国つねに栄あれ

### 3・23小禄大空襲

卒業式の翌三月二十三日、朝八時頃基地建設の労務を割り当てられた母にかわって、飛行場の現場へと家を出て間もなく急に、バリバリバリッ、ドカンドカンと激しい対空砲の音が聞こえて来た。昭和十九年十月十日那覇市が全焼した空襲以来この対空砲の音は何度も聞いているので、すぐ空襲だと気がついて引き返し、家族と共に防空壕に逃げこんだ。昨日学校で情報が悪いといわれたのは、敵の機動部隊が沖縄近海まで来ている意味だったのだなあーと思いながらも、一日に数度の波状攻撃で、それも攻撃目標が飛行場だからそんなに危険でもなく、敵機が来ると壕に逃げ、去ると壕から出て辺りを見廻す状態だったが、敵機の種類がグラマン戦闘機の他に、カーチス艦上爆撃機がふえて来たのが幾らか今までの空襲と違うように感じた。十三粍機関銃でギリギリギリッ、軽快な音を出しながら機銃掃射するグラマン機と違い、胴体が太く重量感のあるカーチス機は、バンバンバンッと腹に響くような二十粍機関砲をうち、大型の爆弾を投下して陣地を破壊する。

明けて二十四日、又早朝から空襲である。いつものように、一日の空襲で終わるものと思っていた住民には、二日も続く空襲は始めての経験で、今までとは違うぞという不安にかられる。その日の十一時半頃、カーチス機が瀬長島の高射砲陣地に集中爆撃をはじめる。那覇飛行場は、三角形の半島状岬になっている大嶺地区にある。米軍機は対空砲のない海上から攻撃態勢に入り海上に逃げる作戦をとっていたが、飛行場南の瀬長島の北端にある海軍の十二粍口径の高射砲陣地は、その作戦に大きな障害になっていた。二十三日に飛行場の飛行機や滑走路を破壊した米軍機は、二日目にこの高射砲陣地の攻撃に移った。十機程のカーチス機が輪状に展開して、南の糸満方面から急降下して爆弾を落とし、海上に去ると次のが又急降下をはじめる。島の北端はみるみる中に真黒な弾煙に包まれて遂に高射砲は鳴りをひそめ、爆弾の炸裂音だけが聞こえるようになつた。これを見ていた私たちは、陣地が完全に破壊されたように見えた。然し日本の高射砲も当たらぬが、米機の爆弾も当たらないらしく、黒煙が消えたら又ドカンドカンと撃ちはじめた。数門あった砲の中、幾つかやられたかも知れないが全滅ではなかった。こんな光景を見ながら住民は、これは只の空襲ではなく、いよいよ戦場化するらしいという不安にかられて行く。

二十五日、三日目も早朝から空襲、爆撃機の攻撃を見て緊張が高まっている時に、午後から本島南部の摩文仁辺りへ艦砲射撃がはじまった。時折グワーングワーンと不気味な鈍い艦砲弾の炸裂音が聞こえ、三時頃になると、壕の上の高い所から敵の軍艦がみると聞いて登って見た。南の水平線上に煙のような黒いものが見える。それが米艦らしいが、はっきり軍艦だと分かる程の距離ではなかつた。五時頃、米軍が西の水平線近くに見える慶良間の阿嘉島に上陸開始と聞いて、いよいよ敵が上陸して戦場化するのか、と悲壮感が漲つて來た。陸軍の下士官が、住民は北部に疎開するように、と壕をまわって触れて歩くので準備にかかる。薄暗くなつた頃、沖の慶良間島で家が燃えているらしく、赤い火が見え、米軍上陸の臨場感がひしひしと迫つて来る。荷物は食糧の他に鍋、北部の山の中は寒いと聞いて掛布団一枚、それに祖先崇拜の強い土地柄だけに仏壇を木毎布団に包んだ。次兄が小学校六年間皆出席の賞に貰つた漢和辞典も、特に私が希望して荷物に入れた。出掛ける前にふと気がついて、陶器類は土中に埋めていけば、家が燃えても又掘り出して使えると、有るだけの陶器類を庭の片隅に穴を掘つて埋めた。これは良い着想だった。翌年村へ帰つた時に、屋敷へ行って見たら、埋めた所から七、八米の所に穴の深さ一米位の弾痕があつたが、陶器類は一枚も割れることなく回収できた。

暗くなった八時頃、母、弟と三人で荷物を分担して伯父一家の荷馬車について、県指定の疎開先名護町目がけて出発。私は布団の中に仏壇その他を入れ、それを縛りつけて背負い、母は食糧と鍋を担ぎ、弟はいろいろな小荷物を背負つて家を後にした。

〔補訂者〕《以下、名護山中での避難生活など、原文29頁中約17頁分省略》

### 新時代の使命感

収容所から探しに来た母と再会、全員一緒に山を下りて収容所へ向かつた。米軍は昨日首里を占領したと祝賀気分だったという。この日五月三十日か三十一日。山の中から出て、古知屋の開墾地に出た所で一休みした。この辺の作戦を終えた米軍は、さらに北上してこの日は明治岳に空陸共同で攻撃し、翼の曲がったコルセア機の落とす爆弾が真っ黒い煙を上げるのが見える。首里が占領されたと聞いて、完全な敗戦の実感が湧いてくる。宜野座の収容所に何千人の避難民が収容されていて、食糧も天幕も与えられているのを知りながら今まで山の中に閉じこもっていたのは、まだ完全な敗戦の実感が無かつたからである。悲しいような、淋しいような、或いは空しいとでも

### 沖縄文教学校寮歌

- 一 空は明け初め ほのぼのと  
起きよ目覚めよ 鐘は鳴る  
生氣溢るる うるま島  
希望は躍る このあした  
いざや磨かむ 諸共に
- 二 文の林に 分け入りて  
極めつくさむ 我が友よ  
勇め励まし 善きにつき  
理想に燃ゆる 我等こそ  
新建設の 力なれ
- 三 松は緑の 色深く  
学びの庭に なごみあり  
団欒ゆかしき 我が友よ  
心豊けく 健やかに  
巣立つ我等ぞ 誇りなる
- 四 享けし血潮の 腕をもて  
伸ばし興さむ うまし郷  
馳する思いは 幾千里  
使命に勇む 夢まどか  
遙か彼方に 幸多し

表現されるのだろうか。戦争の日々を逞しく生き抜いた少年の全身から活力が抜けて行った。

二十一年五月に沖縄文教学校農林部に入学した。アメリカ兵が引き揚げた後の天幕を利用した全寮制の学校で、又新しい活力を得て勉強を始め、声高らかに寮歌を歌った。一年前、小学校の卒業式で、「見よ東海の空明けて」と歌い、今又新しい夜明けを歌う。大君の為に死ぬ使命感を捨て、文の林に分け入って極めつくり、理想に燃えて新しい時代を築く使命感を持った。

毎日空腹をかかえながら、ノートも教科書も満足にない中で、燈心から真っ黒い煤を出して燃えるランプを灯して勉強した。恵まれない環境の中で、少年は活力を取り戻し夢多く燃える青春の日を迎えた。

1990(平成2年)一月二十日 高良益人

東京都足立区本木西町にて

### 附:「きらぎ」考

4月6日から約一週間暮らした古知屋岳頂上近くの避難小屋の近くに、稜線に沿って東西に延びる尾根道と交叉するように南北に延びる山越えの道があった。この稜線の尾根道と山越えの道の交叉する十字路辺りの稜線はレンズの凹面のような曲線になっていて、その最も低い所を山越えの道が横切っていた。私は峠の字や「とうげ」という言葉を見聞きする度にこの避難小屋近くの山道の交叉点の辺りを思い出す。とうげは現在手向けの転と考えられているが、私は山の稜線のたわの低部を横切る道で、撓気道の意ではないかと思う。この避難小屋の近くにあった尾根道の凹曲線は端から端まで約十米位で、たわと表現するには短すぎるが人間が山越えをする時に一番楽に通過できる山越え道の原形をなしていたような気がする。

現那覇市に合併された旧小禄村の中を横切る、糸満街道の南の豊見城村との村境の坂道辺りを、私達は「きらぎ」といっている。何の意味かよく分からなかつたが、同じ糸満街道の北の旧那覇市との村境の坂道辺りを、糸満の魚売りの小母さん達は「きだき」といっていたらしい(農山漁村文化協会 日本の食生活全集47『聞き書き 沖縄の食事』102ページ)。現在のように岡を切り通して大きな道路を開通させる以前の、この「きだき」「きらぎ」辺りの道路は、段々のきだ状の道で、これを土地の人達は「きだき、段氣」といい、南の村境ではそれを「きらぎ」と発音していたのであろう。北側の「きだき」を現在「がじやんびら」というのも、がじやん(蚊)の意味ではなく、恐らく「きだのひら坂」のきだがきざになり、方言で「きざぬひら」から「がじやんびら」に変化したのではないかと思う。この「きだき」「きらぎ」の地名から考えて、昔の人は道の周辺状況によって「きだき 段氣」「たわけ 撓氣」といっていたのではないだろうか。

### 【校歌及び運動会の歌】

三

二

一

強<sup>ツ</sup>栄<sup>カ</sup>自<sup>シ</sup>盡<sup>ツ</sup>御<sup>ミ</sup>世<sup>セ</sup>鍛<sup>キ</sup>尊<sup>ダ</sup>君<sup>キ</sup>瀬<sup>セ</sup>昇<sup>ム</sup>古<sup>コ</sup>勤<sup>イ</sup>学<sup>マ</sup>こ 肇<sup>シ</sup>常<sup>キ</sup>機<sup>イ</sup>  
き ゆ 立<sup>リ</sup>く 祖<sup>カ</sup>界<sup>カ</sup>へ き と 長<sup>カ</sup>る 城<sup>ジ</sup>しびれ ゆ 盤<sup>ハ</sup>に  
御<sup>ミ</sup>く 進<sup>シ</sup>す の に 練<sup>ネ</sup>誓<sup>チ</sup>親<sup>カ</sup>の 朝<sup>ア</sup>の み の ぞる の 不<sup>フ</sup>  
民<sup>タ</sup>御<sup>ミ</sup>取<sup>シ</sup>は 地<sup>チ</sup>富<sup>ミ</sup>り ひ と 浦<sup>ラ</sup>日<sup>ヒ</sup>彼<sup>カ</sup>摘<sup>ツ</sup>園<sup>ン</sup>我<sup>ワ</sup>甍<sup>イ</sup>緑<sup>ミ</sup>断<sup>ダ</sup>  
と 代<sup>ヨ</sup>の 同<sup>ニ</sup>を て 固<sup>カ</sup>に に の 方<sup>タ</sup>ま に 等<sup>ラ</sup>搖<sup>ユ</sup>濃<sup>コ</sup>の  
我<sup>ワ</sup>に 意<sup>イ</sup>じ 鍼<sup>ク</sup>求<sup>モ</sup>む め 仕<sup>カ</sup>丹=勇<sup>イ</sup>雲<sup>モ</sup>む 瞳<sup>シ</sup>が る き 花<sup>ハ</sup>  
成<sup>ナ</sup>後<sup>オ</sup>氣<sup>キ</sup>真<sup>マ</sup>と む 身<sup>ミ</sup>つ へ ほ ま 晴<sup>ハ</sup>教<sup>ラ</sup>み 学<sup>マ</sup>ぎ 所<sup>ト</sup>咲<sup>サ</sup>  
られを 実<sup>ト</sup>る ると な ふ し れ へ つ び な き  
む さ も な も も 心<sup>コ</sup> む と く て 草<sup>サ</sup>の し て  
る て り き 舎<sup>ヤ</sup>

小小  
禄尋  
第一  
国民  
学校  
校  
歌

復作  
元曲  
詞  
高  
良  
益  
人

凱<sup>カ</sup>凱<sup>カ</sup>優<sup>カ</sup>日<sup>カ</sup>日<sup>カ</sup>終<sup>カ</sup>競<sup>カ</sup>  
歌<sup>カ</sup>歌<sup>カ</sup>勝<sup>カ</sup>頃<sup>カ</sup>はれ<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>  
の<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>劣<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>早<sup>カ</sup>り競<sup>カ</sup>  
声<sup>カ</sup>声<sup>カ</sup>敗<sup>カ</sup>練<sup>カ</sup>や終<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>  
は<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>審<sup>カ</sup>磨<sup>カ</sup>傾<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>  
天<sup>カ</sup>天<sup>カ</sup>判<sup>カ</sup>そき<sup>カ</sup>り運<sup>カ</sup>  
に<sup>カ</sup>に<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>の夕<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>動<sup>カ</sup>  
も<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>み<sup>カ</sup>功<sup>カ</sup>風<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>会<sup>カ</sup>  
ひ<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>顕<sup>カ</sup>涼<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>  
ぐ<sup>カ</sup>ぐ<sup>カ</sup>著<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>愉<sup>カ</sup>  
く<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>快<sup>カ</sup>

真<sup>カ</sup>真<sup>カ</sup>正<sup>カ</sup>鍛<sup>カ</sup>吹<sup>カ</sup>来<sup>カ</sup>待<sup>カ</sup>  
先<sup>カ</sup>先<sup>カ</sup>々<sup>カ</sup>へ<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>た<sup>カ</sup>ち<sup>カ</sup>  
駆<sup>カ</sup>駆<sup>カ</sup>堂<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>風<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>に<sup>カ</sup>  
け<sup>カ</sup>け<sup>カ</sup>々<sup>カ</sup>身<sup>シ</sup>涼<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>待<sup>カ</sup>  
て<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>軀<sup>シ</sup>し<sup>カ</sup>來<sup>カ</sup>ち<sup>カ</sup>  
後<sup>カ</sup>後<sup>カ</sup>で<sup>カ</sup>練<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>た<sup>カ</sup>た<sup>カ</sup>  
れ<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>日<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>  
は<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>で<sup>カ</sup>た<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>運<sup>カ</sup>  
と<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>示<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>動<sup>カ</sup>  
ら<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>手<sup>ラ</sup>一<sup>カ</sup>会<sup>カ</sup>  
じ<sup>カ</sup>じ<sup>カ</sup>む<sup>カ</sup>並<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>愉<sup>カ</sup>  
快<sup>カ</sup>

一<sup>カ</sup>開<sup>カ</sup>會<sup>カ</sup>  
運<sup>カ</sup>動<sup>カ</sup>會<sup>カ</sup>  
の<sup>カ</sup>歌<sup>カ</sup>

作<sup>カ</sup>作<sup>カ</sup>  
曲<sup>カ</sup>詞<sup>カ</sup>  
高<sup>カ</sup>良<sup>カ</sup>益<sup>カ</sup>人<sup>カ</sup>

## 第16回総会を開催す

平成30年7月5日にJAおきなわ小禄支店3Fホールにて総会を開催しました。活動報告、会計報告、活動計画、会則の改正、役員改選が承認されました。

総会終了後には「戦前期小禄村の小学校歌の集い」が行われ、沖縄戦で楽譜や資料がなくなった小禄第一国民学校と小禄第二国民学校の校歌メロディーを卒業生の歌を基に再現し卒業生が懐かしの校歌を合唱しました。

小禄第一国民学校は1880年に小禄間切番所内に置かれた学校としてスタート。当間村と赤嶺村に校舎を移転したことから通称「当間学校」と呼ばれた、大正12年県内初の赤レンガ造りの学校だった。

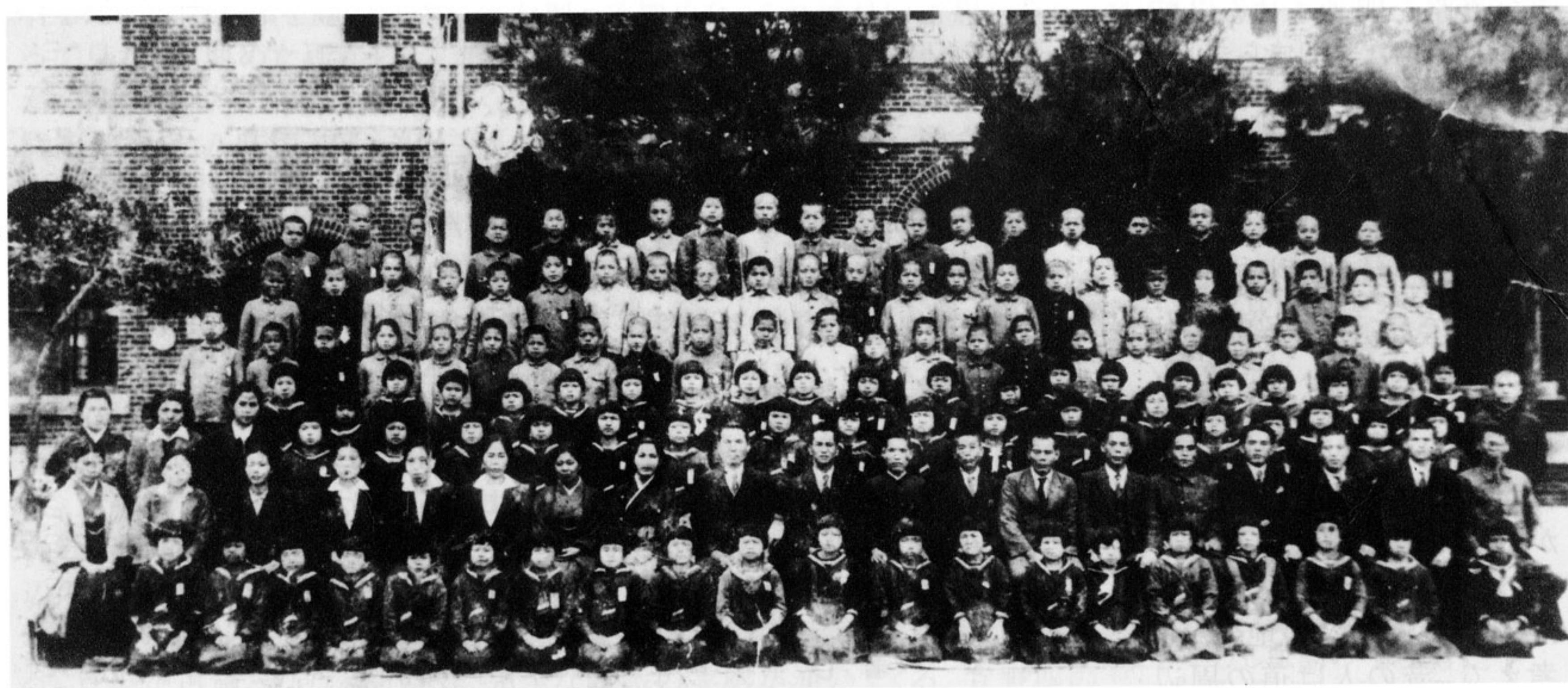
小禄第二国民学校は当間学校から分離して、金城村に新築され通称「金城学校」と呼ばれた。両校の校舎や学校資料のほとんどが沖縄戦で消失し校歌の旋律も不明になっていた。

当会の平良徹也さんが5年ほど前に地域調査中、当間学校校歌の存在を知ったことがきっかけで、卒業生に記憶を頼りに歌ってもらい歌声を録音した。当会の長嶺弘善・和子さん夫妻に協力を求め、和子さんが録音した歌声を基に、試行錯誤しながら楽譜を起こした。集いでは、和子さんのキーボード伴奏に合わせて卒業生4人と参加者全員で校歌を歌った。



校歌の集い卒業生と参加者

(前列右4人目から) 金城学校と当間学校を卒業した最高齢の上原政男さん(93歳)、当間学校卒業生の新垣幸子さん(89歳)、長嶺操さん(88歳)、金城学校卒業の上江洲美代子さん(89歳)



1943（昭和18）年、小禄第一国民学校卒業式（6年）【写真提供：長嶺操 氏（字赤嶺）】

長嶺操さん（上から2段、右から4人目）、大宜見朝省先生（2列目右から2人目）、竹組：上里良蔵先生（操さんの担任・9人目）、松組：喜久村潔能先生（10人目）、与那国善三校長（11人目）、梅組：牧志キク先生（12人目）

【編集委員：高良 広輝】

▼お名前の誤りがあり、お詫び申し上げますとともに訂正方をお願い申し上げます。

喜久村潔能先生（誤）→（正）喜久村絜能先生、牧志キク先生（誤）→（正）牧志キヨ先生